

## ひじりの声

上田藤市郎

藤樹書院で、毎月第一日曜日の午後藤樹先生にかかわる講書会を開いている。先月、数年間かかったが、「論語」の講読を終えた。論語の最終章「孔子」の講読が言われた。人間は天から与えられた使命を自覚しない者は、教養人と言えない。社会で礼をわきまえない者は、自立できていない。相手の言葉の真義を聴き取ろうとしない者は、人を本当に理解することはできない。」と、私は読み取っている。

孔子様も藤樹先生も、社会の指導的立場にある者は、自らを慎み研鑽を積んで、なお謙虚であることを示しておられる。今、世界のまた我が国の政治家、企業、大学関係者、スポーツ界地方の首長、議員諸氏の言動を側聞すると、これら責任ある立場の人々が、どのような使命感を自覚しているのかが疑われる。今日では、インターネットの発達によって、内外を問わず所得格差が飛躍的に拡大している。概して指導的立場にある人は裕福であり、自国や自分の所属団体、各界の利益第一、私利私欲を図り、権力を駆使でき、儲ければ内容不問の姿勢が目立つことも多い。この驕りは謙虚さを欠きマスコミに対する不遜な態度は、人の意見を聞く耳をもたずということになる。

今、指導的立場にある人々にこそ「論語」の最終章を味読していただきたいものである。

## 大洲市への義援金について

大洲市の災害をお見舞いする義援金は、会員四十五人様から二十二万六千円集まりました。ご協力いただきました会員の皆様ありがとうございました。高島藤樹会から少し加えて二十五万円を、11月5日に大洲市の義援金口座に振り込ませていただきました。早速大洲藤樹会会長の上久保政夫様よりご丁寧なお礼状を頂戴しました。(一部紹介します)

「……さて、この度は、高島藤樹会より大洲市民に対して、心温まる多額のお見舞いを賜り、大洲藤樹会よりも厚くお礼申し上げます。貴藤樹会員の激励にこたえて全市民一致固結して発奮興起していく所存であります。ありがとうございました。」

ところで、大洲市は、この夏の前代未聞の大豪雨により大水害に見舞われ日々市民の総力を挙げて懸命の復興活動が続いております。このような状況の中で、大洲市や各種団体等が主催する行事は中止をし、まずは復興ということががんばっておりますが、少しづつ民意も安定し、この秋の大洲祭りや藤樹祭り等の行事は平年通りに盛大に開催することができました。

今後は、一日も早く正常で安定した市民生活に戻れるよう頑張っていく所存です。ここに深く感謝の意を表し、貴高島藤樹会のみならずのご発展と会員の皆様のご健勝を祈念し、お礼まで申し上げます。……」

## 「藤樹紙芝居」の紹介⑫

『久子夫人と先生』

(解説)

この話は、与右衛門さんが二十八歳で大洲から小川村に帰ってからの家庭生活を中心に描いたお話しです。与右衛門さんは、生活を支えるために酒や米の販売をしながら、自らの学問研究に励みました。しかし、帰郷を知った近江の国の各地から、また、大洲からもたくさんの方々が集まって来ました。そのため、与右衛門さんは次第に多忙な日々を送るようになりました。

与右衛門さんは、学んできた『礼記』の内容に従って、結婚する年齢を三十歳と考えていました。縁あって迎えた久子夫人は、容貌には恵まれていませんでしたが、誠実で心優しい人柄であったと、伝えられています。夫人は、家族のため、門人のため、労苦をいとわず一生懸命働きました。

この間約十年、先生の学究は深まり、「翁問答」「孝経啓蒙」「捷徑医筌」「鑑草」等の教本がまとめられました。久子夫人の支えがあればこそ、門人たちの教育や、著述の充実ができたと言えましょう。残念なことには、久子夫人は与右衛門さんのもとに嫁いで九年目、次男を出産した後の肥立ちが悪く、二十七歳の若

さで亡くなりました。

与右衛門さんの遺徳とともに、支え続けた久子夫人の、温かで誠実な生き方を知ってもらいたいと考え、この紙芝居を作りました。

(紙芝居)

① 先生が二十八歳で小川村に帰って、二年ほど過ぎました。先生の学徳は、いよいよ深く、世の中に知られるようになりました。門人も次第に増えてきました。

与右衛門「ああ、眠い。昨晚は遅くまで起きていたなあ。みんなが熱



心なので、私もついついがんばったぞ。おや、落ち葉がたまっていく。まずは勉強室の掃除だ。」

先生は、勉強室と庭の掃除をすませ、お酒の商いの準備を大急ぎでしていました。

② お母さんの市さんが、起きてきました。

お母さん「まあ、与右衛門。もう掃除をしたのですか。与右衛門が一